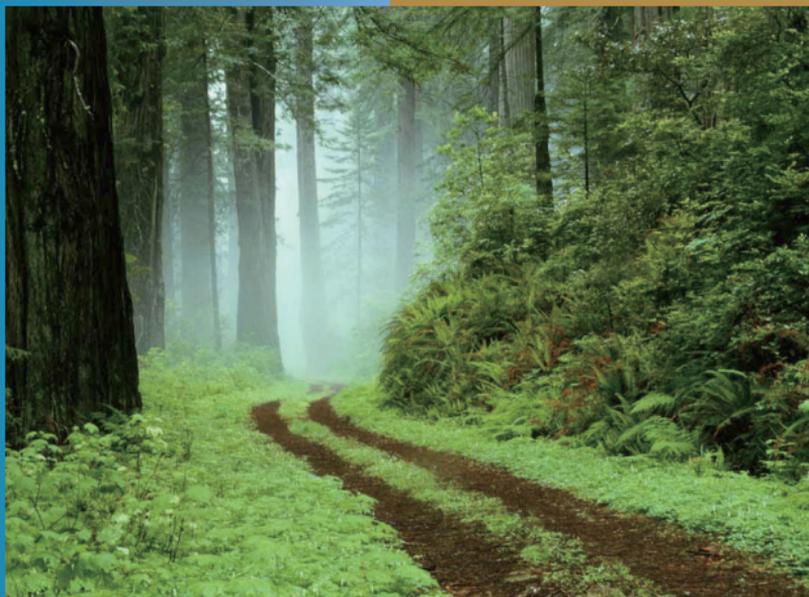


The Narrow Way

狭き道の旅

Revival Booklet Series No.4



リバイバルシリーズ No.4

E. G. ホワイト



SUNRISE MINISTRY

目次

ホワイト夫人略伝 21章～23章より Contents

二つの道 1

二つの冠 11

狭き道の旅 26

二つの道

.....

1856年5月27日アメリカ合衆国ミシガン州バトルクリークにおいて開催された総会で、私は教会全体に関するある事柄を幻によって示された。神の威光と栄光とが私の前を過ぎた。天使は私に次の様に語った。「おそるべき神の栄光、しかしあなた方はこれを悟らない。おそるべき神の怒り、しかしあなた方は日々彼を怒らせている。狭き門から入るために力を尽くせ、滅びに至る道は広く、その門は大きい、これから入る者は多い。生命に至る道は狭くその門は小さい、その道を行く者は少ない」と。この二つの道は全く異なったものであり、正反対の方向に導くものである。ひとつは限りない命に至り、他は限りない死に至る。私はこの二つの道が相反したものであると共に、それを歩んでいる者達も、全く異なった集団のものである事実を見た。一方の道は狭くでこぼこの多いものであったが、他方の道は平坦で広いものであった。



この二つの道を旅している人々は、その性格の点において、あるいは生活・服装・会話などの点において相反するものであった。

狭い道を歩んでいる人々は、彼等の旅道の終わりに持つ喜びと楽しみについて語っていた。時として彼等の顔には悲しみの色が現れることもあったが、聖い喜びで輝くこともしばしばであった。彼等は、広い道を歩む人達のような服装はせず、



彼等の様な会話はせず、彼等の様な行為はしなかった。彼等には一つの模範が与えられていた。悲しみの人で数々の悩みを知っておられる主イエスは、彼等の行手を示し、御自身も親しくその道を旅されたのである。さきにキリストが安全にその道を通り過ぎられたので、彼等もその御足跡にならってこれに従うならば、安全に通過することができるのであった。

広い道を歩んでいる人達は、ただ自分のこと、服装の事、道中の楽しみ等に熱中していた。彼等は種々の快樂にふけり、行き着く先にはのがれることのできない滅亡が待っていることなど一向に気にしなかった。

一日一日滅亡が近づいているにもかかわらず、彼等は無謀にも突進して止まらなかった。そのことはなんとおそろしく私の眼に映ったことであろう。

この広い道を歩む人々の中に、「私は世に対して死んだ者である。万物の終わりが近づいている。あなた方も備えをせよ」とその衣服に書いているのを見た。その顔に憂いを帯びている他は、彼らには道行く人々と何ら違った点を見出すことができなかった。彼らの会話は、その周囲にいる快樂を追う者と同様、何ら変わりなく、ただ時として満身に溢れた顔色をしつつ、彼等の衣服の上に記された言葉に人々の注意を促し、彼等も自分と同様の看板を懸けるように勧めた。これらの人達は、自分は狭い道を歩む者であると公言してはいたが、実際は広い道を歩む者であった。又周囲の人々は「わたしたちとあなた方との間には何の相違もない、その服装にしても会話にしても行為にしても一切同じである」と言っていた。

次に私は1843年 - 1844年の当時の事を回顧させられた。当時の人達は、熱心な信仰を持ち、献身の精神に溢れていたが、現在はそうでなかった。どうしてこの様な変化が、いわゆる神の特殊な民である事



を自認するものの上に来たのであろうか？
それは他でもない、世俗との妥協、真理の為には喜んで苦しむという精神に欠けた結果であることが判った。神の御

旨に対する服従の精神が大いに欠けていることに起因するものであることが示された。私は、イスラエル人がエジプトを脱出して後の状態について、思い起こさせられた。神は、その大きな慈愛の故に、彼等をエジプト人の中から召し出されたが、これは彼らが何ら拘束されず、自由に神を礼拝できるようにするためであった。神は道すがら彼等の為に奇跡を行い、険しい困難な道に導き、彼等を試みられた。彼等は不思議な神のお導きと、しばしば神が救済の御手を伸ばされた事実を体験させられていたにもかかわらず、彼らが神によって試みられた時に、つぶやきの言葉が出て来た。「わたしたちはエジプトの地で主の手にかかって死んでいたらよかった」と彼等は言った。彼等はエジプトののらやたまねぎが恋しかったのであった。

終末に関する真理を信じると自称する多くの者は、昔のイスラエルの民が神の驚くべき助けを受けながら尚その恵みを忘れ、旅行中しばしばつぶやいたことを不思議に思うものがあるのを見た。しかし天使は語った。「あなた方は彼らよりも悪いことをした」と。神はその僕達にだれも否認することのできない明確な真理をお与えになられた。故に彼らは、その行く先々において勝利することができるのであった。彼らに向かって争って来るものも、その真理の前には歯が立たないのであった。神の僕達が至る所に真理をこうこうと照らし、勝利を得るために既に光は照っているのである。このように大きな祝福のありがたみを悟らず、又それに浴しようともしていない。従って、極めて些細な試練に出会っても、直ちに後ろを振り返り、一大困難の中に自分は苦しんでいるかのように考える。時としては自分で試練を招きながら、試練に遭わせられたかのように考え、ちょっとしたことですぐに失望し、何かと言えば直ぐに気を悪くし、誤解し、自尊心が傷つけられたと感じ、自分だけでなく他の人及び御事業までも傷つけている。サタンは又彼らにその試みを大きな物の様に思わせ、その試みに屈するならば、彼らの感化と有用さとを失い、再び起き上がることはできないか

のように思わせている。

或る者は試みに出会った時、御事業を止めて自分で働いた方が良いという思いを起すものもあった。万一神が、彼等から愛の御手を取り除き、彼等を疫病或は死の中に放置なさったら、きっと彼等は艱難とは何であったかを知るに違いない。神に対してつぶやくことは何よりも恐るべきことである。彼等は、自分達の歩むべき道が険しい道、克己と自己犠牲の道であることを忘れて、いつも広く平らで安易な道を歩むものと思いきこんでいるのである。

神の僕でしかも教職の任にあるものですら、往々にして、自分はいいかげんに扱われているとか、不当な取り扱いを受けているとか考えて、事實はそうでないのに、直ぐに失望したり不機嫌になったりするのを見た。彼等は、如何にも自分が不遇の立場に置かれているかの様に思い込む。万一彼等から神の支えの御手が除かれ、実際苦悩の経験をなめるに至ったならば、どんなに苦しいものであるかを彼等は知らないのである。その場合彼等は、従来多少の困難と不自由を忍びつつも御事業に携わり、神に嘉されていた時よりも、それとは比べものにならない程の困難な境遇に陥った自分

を見出すであろう。

神の御事業に従事している時の方が、如何に順境であるかを悟らない者がある。殆ど何の不自由もなく暮し、救霊のためそれほどの骨折りも労苦もせずにながら、その真相を知らず、自分は大きな困難と試練のうちにあるかの様に考える。この種の者が、自分のことばかり考えず、我を忘れ喜んで働く犠牲的精神を持たないならば、遂に神は彼等を御事業より解き放たれる事実を私は示された。神はこの様な者を犠牲的精神に富む僕とはお認めにならず、今度は怠け者でなく、熱心・勤勉に働く者、順境にあつてどの様に働くかを知る僕を起こされる。もし神の僕であるならば、救霊の責任を感じて、廊と祭壇の間で泣き、『主よ、あなたの民を救って下さい』と祈るものでなければならない。

神の僕の中でも、御事業のためにその全生涯を捧げ、健康を損なうまであらゆる心配・苦勞・不自由を忍んでいるものがあるかと思うと、一方重荷を負うこともしなければこれを担おうともしないものがある。それでも後者は、自ら困難を経験したことがないため、いつも自分は困難のうちにあるかの様に思っている。彼等が、この様な弱々しい堅忍不拔の精神に欠けた状態

でもって、安逸を貪っている間は、決して主の苦しみのバプテスマにあずかることはできない。

神が私に示されたところによるならば、教役者中、不熱心で怠慢且つ利己本位の者はことごとく振るい落とされ、そのあとには、潔白・忠実で犠牲の精神に溢れ、自分の便宜を考えない者、キリストが己が血をもって贖われた人々を救うために、教えと勧めとをもって熱心に働き、主のためにどんな苦難でも喜んで受けるもののみ残ることが明らかになった。この様にして、あとに残されたものが、福音をのべ伝えなければ禍いであるという事実を痛感すればよいのだが、まだそれを感じないものがある。



二つの冠

.....

1861年10月25日ミシガン州バトルクリークにおいて、私は幻によって暗黒・陰惨なこの地上を見た。天使によって「よく観察しなさい」との注意を受けた。次いで私には地上の住民のことが示された。あるものは神の使い達によって囲まれていたが、あるものは悪天使等に囲まれて真っ暗がりの中にいた。次いで天より金の王笏を持つ手が下って来た。その王笏の頂きには、多くのダイヤモンドがちりばめられた一個の冠があった。ダイヤモンドは、いずれも燦然（さんぜん）と輝いていた。その冠には「これを得る者は幸いである、その人は限りない命を得る」との言が刻んであった。



下の方には、もう一つ王笏があった。おなじように、その頂には一個の冠があった。又王笏は宝石と金銀がちりばめられ、ある種の光を放っていた。その冠には「地上の宝、富は権力である。これを得る者は尊ばれ・名誉を得る」と記されていた。多くの群衆が、この冠

を手に入れようとして、突進している光景を見た。彼等は大騒ぎをしていた。熱心のあまり気が狂った状態の者もいた。押し合い争い合って、自分よりも弱い者は後方へ押し返し、あまり急いで転んでいるものなどは、容赦なくこれを踏み越えて行った。その冠の宝に手をかけた多くのものは、それを離さず固く握っていた。その中には頭上に白髪を頂き、その顔には永年の心配と苦労のあとが深く印されているものもいた。彼等は、自分の骨の骨・肉の肉である家族の者さえ顧みず、助けを求める彼らの哀れなまなざしを見ると、その手にしているものをうかつに離すまい、またそれらの人々にわかるようなことがあってはと、増々固く握りしめていた。彼等の欲深い目はただこの地上の冠のみに奪われ、これを見つめ、繰り返し繰り返し幾度も幾度もその数をかぞえていた。

群衆の中にはいかにも哀れな物欲しそうな見すばらしい様子のものがいた。彼等は、宝の方に顔を向けてこれを欲しそうにしているが、いつも強い人のために追い返されて失望に終わる。それでもあきらめることができず、多くの不具者や、病人、老人などと共に、この地上の冠を得ようとして突き進む。多くの者はそ

れを手に入れずに死んでしまう。今にも手が届きそうになりながら倒れるものも多い。一面に死体が散らばっているが、群衆は死んでいるもの、倒れている仲間を踏み越えて突進する。その冠に手が届いたものは幾分かの分け前を得、冠の周囲に立っている一団の者たちから褒められ喝采される。

数多くの悪天使からなる集団のものは、非常に忙しくしていた。彼等の真中にはサタンが立っており、一回は非常に満足そうに、冠を得ようとして争っている人々を眺めていた。サタンは、それを熱心に求めているものの上に、一種言うに言われぬ魅力を投げかけていた。

この様な地上の冠を手に入れようとして奔走している者の多くは、いわゆるクリスチャンと称するものであった。ある者は多少真理を知っていた。彼等は、天の冠を好ましく感じ、その美についてしばしば惹かれはするが、その本当の価値と光輝とを悟らず、その方に向かって力



なく手を伸ばしていながらも、片方では熱心に地上の冠の方に手を延ばし、しきりにこれを手に入れようとしていた。熱烈に地上のものを追求するあまり、天上のものを見失ってしまった。その結果として暗黒のうちに放置されたが、尚それでも地上の冠を獲得しようとして暗中模索していた。

そのうちに、こうした地上の宝を熱心に求める者と共に居ることがいやになって来たものがいた。彼等は自分の危険を悟ったのか、これを捨てて天の冠を熱心に追求するようになった。今迄暗黒であった彼等の顔には急に光が輝き、陰鬱だった顔が一変して快活になり大いなる喜びに輝くようになった。

その眼を天の冠に注いで、群衆のなかを進む一団のものを私は見た。彼等が一生懸命に騒然たる群衆を押し分けて進み行こうとするとき、天使たちはこれに同伴して彼等の進み行く道を開いた。彼等が天の冠に近づくに従い、それから放射される燦然（さんぜん）たる光が、彼等とその周囲を照らし、暗黒を払い、しかもその光がいよいよ煌々と輝くに従って、彼等の姿は変わって天使に似た



ものとなった。彼等は後ろを振り向いて、地上の冠に眼を注ぐ事を一度もしなかった。地上の冠を追い求めるものは彼等を嘲笑し、ばかにして黒い玉のようなものを投げつけた。彼等がしっかりとその眼を天上の冠に注いでいる限りそれによって何ら危害を受けなかったが、この黒い玉のようなものに気を奪われたものはそれによって汚された。この時私には次の句が示された。

「あなたがたは自分のために、虫が食い、さびがつき、また、盗人らが押し入って盗み出すような地上に、宝をたくわえてはならない。むしろ自分のため、虫も食わず、さびもつかず、また、盗人らが押し入って盗み出すこともない天に、宝をたくわえなさい。あなたの宝のある所には、心もあるからである。目はからだのあかりである。だから、あなたの目が澄んでおれば、全身も明るいだろう。しかし、あなたの目が悪ければ、全身も暗いだろう。だから、もしあなたの内なる光が暗ければ、その暗さは、どんなであろう。だれも、ふたりの主人に

兼ね仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛し、あるいは、一方に親しんで他方をうとんじるからである。あなたがたは、神と富とに兼ね仕えることはできない」。(マタイ 6 : 19-24)

次いで私の見たことに対し、以下の説明が与えられた。地上の冠を手に入れようとして懸命になっている群衆は、世俗の財宝を愛し、その魅力によっておだてられ欺かれているのである。イエスを信ずると称しながらも、地上の富の獲得に熱中しているものは、天に対する愛を失い、世俗の人々と同様の行動に出て、神によって世のものと見なされるに至る。彼等は口では朽ちる事のない冠、天上の宝を求めるものであると言いながら、彼らの興味と主な研究は、地上の宝を獲得することであった。地に宝を蓄え、富を愛する者はイエスを愛する事ができない。彼等は自分では間違っていないと考えているが、実際は守銭奴の様に自分の所有をしっかりと握っている。それにもかかわらず、福音事業あるいは天の宝以上に金銭に愛着を持っていることを彼等に自覚させることはほとんど不可能である。

「しかし、あなたの目が悪ければ、全身も暗いだろう。

だから、もしあなたの内なる光が暗ければ、その暗さは、どんなであろう」と。この種の人々の経験の中には、与えられた光を受け入れなかった時期がある。そして光明は変わって暗黒となったのである。「彼らが世の宝を愛し、真の富を拒んでいるならば、決してそれを所有することができない」と天使は言った。



あの富める青年がイエスの許に来て、「よき師よ、永遠の生命を受ける為に何をしたらよいでしょうか」と質問した時、イエスは彼に、自分の財産を



捨てて永遠の命を受けるか、あるいはこれに執着して永遠の命を失うか、二者択一を迫られた。この富める青年にとって、その財産は天上の宝よりも価値あるものであった。限りない命を受けるため、すなわちキリストに従うため、条件として自分の財産を棄てこれを貧しい者に分け与えることは、彼にとって耐え得ない

ことであつたので、せつかくの熱望も冷め、悲しみながら去つた。地上の冠を得るためにひしめき騒いでいるものは、目的のためには手段を選ばない類の人々であることが示された。この点、彼等は、狂気状態にあるのであつた。地上の富の獲得に、彼等は、自分の能力と思慮の一切を注いでいた。彼等は他人の権利をふみにじり、貧しい者を虐げ、払うべき者に払わなかつた。彼等は貧しい者の弱みに付け込み、自分達程狡猾でないものの目をかすめ、自己の富の増加を計っているのである。そして彼等を虐げ圧迫するだけでなく、全くの貧困状態に陥れる事すら、あえて躊躇しなかつた。

すでに老齡になり白髪となつて、その顔は心配苦勞で皺だらけになつていながら、冠の中にある宝を握っている者があつた。彼等は余命幾ばくもないものであるにもかかわらず、地上の宝を失うまいと苦心していた。いよいよ墓に近づけば近づく程、地上の所有を失うまいと苦心していた。

彼等の親戚の者は何一つ潤されない。自分の家族のものですら、懸命に働いて僅かばかりの無理な節約が強いられる。彼等はその得た金で、同胞を幸せにする事も、家の費用のためにも用いない。彼等にとって、

いくら蓄財ができているかが解れば充分なのである。貧しいものを助けるとか、御事業を支える為になすべき務めが示されるとき、彼等は悲しむ。彼等は限りなき命の賜物を喜んで受けはするが、少しの犠牲も払おうとしない。神の求められる条件に応ずることが、彼等には困難なのである。しかしながらアブラハムはどうだったか、彼は自分の子すら惜しまなかった。約束によってようやく与えられたいとし子を、神の御前に犠牲にすることすら敢えて辞さなかった。多くのものが自己の所有物を犠牲にするよりももっと易しい方法でこれをなした。

栄光の実を結び、日々朽ちない生命を受けるため準備すべきはずのものが、地上の宝を失うまいとして全力を傾けていることは、実



に見るに忍びない光景であった。彼等は天上の宝の価値を知ることのできない者であることを、私は知った。地上の宝に対する強烈な執着に基づく彼等の行動によって、犠牲を払ってまで天上の嗣業を得る必要はないという考えを現しているようなものであった。

かの富める「青年」は、自ら進んで戒めを守っていると表明したが、主は彼に、あなたは尚一つを欠いていると仰せになった。彼は限らない命を欲しはしたが、それ以上にこの世の財産に愛着を持っていた。これと同様の自己欺瞞に陥っているものが多い。彼等は隠れた宝を探す者の様に真理を探究しない。彼等はその為に全力を傾けていない。当然天来の光で照らされるべきはずの彼等の真意が心配・苦勞で常に乱されている。「この世の思い煩いと、財産の惑わしに教えをふさがれて、実らない者となる」「彼らは何一つ言い訳はできない」と天使は語った。私は、光が彼等から取り去られるのを見た。彼等は、現代に対する嚴肅な使命を理解しようとはせず、別にそうした事は知らなくても大丈夫だと考えた。そのために光は消え、彼らは暗中摸索状態に陥ってしまった。

地上の冠に向かって突進していた数多くの不具者と病人も、この世の財宝を求めるものであった。そのため彼等は、度々失望をしたにもかかわらず、天の宝を求めることをせず、天の財産と住居を獲得することを好まなかった。彼らは地上のものを手に入れることができず、いたずらにそれを追求している間に、天上の

ものを失ってしまった。地上の富の獲得に没頭する者のなめる失望と、不幸極まる生涯、あるいは悲惨な死を数々目撃しているにもかかわらず、多くのものは彼等と同じ道を歩んでいた。彼らは気が狂った様に盲進し、彼らの先達となる者の陥った悲惨な運命については、一向に無頓着であった。

冠に手をつけその分け前にあずかったものは、称賛を博した。彼等は、その全生涯を賭けた目的 - 即ち富を得たのである。富める者に対して世の与える栄誉を獲得するわけである。それによって彼らは勢力を振るうことになるのであった。この種の人々は、自分の仲間であることを、サタンと悪天使たちは知っているので、満足した。実際に、彼らが神に向かって反逆の生涯を送っている限り、サタンの有力な僕であることは明らかであった。地上の冠を得るためにひしめき争うことにいや気がさしてきた者は、地上の富を争う者の終局と、この様な生活の真相とに気づく。そして驚き身震いし、この様なあさましい生涯を送っているものと別れ、永遠に続く真の富を追求するようになる。

天の冠を手にするために群衆を押し分けて進むものには、聖い天使達が同伴していること、又彼等は、神

の忠実な民であることが私に示された。彼等は天使達に導かれ、ますます勇気に満たされて天の宝を得るために前進した。

聖徒達に投げつけられた黒い玉とは、他でもない偽りを愛しそれを行う者達が、神の民に向かって投げかけるでたらめな非難であった。日々罪なき生涯を送り、あらゆる悪と思われることを避けるため、最大の関心を持たねばならないことは当然ではあるが、それと共に



悪者達の投げかけるでたらめな非難を全く気にせず、大胆に前進する必要がある。正しい者の眼が、天の限りない価値ある宝に注がれるとき、彼等はいよいよキリストの様になり、栄化・昇天するのにふさわしいものとされるのである。

狭き道の旅

.....

1868年8月、ミシガン州バトル・クリークにおいて、夢の中で私は自分が一大群衆の中にいる光景を見た。群衆中のある者は、今まさに旅立つ準備をしていた。荷物を積み込んだ重い馬車に乗って、私たちは出発した。間もなくすると、私たちは坂道にさしかかった。道の片側は険しい断崖で、もう片側は白い滑らかな岩石が屏風のようにまっすぐに切り立っていた。

旅路を重ね前進していくに従って、道はいよいよ狭く険しくなり、ある地点まで来た時、もはや荷車では進むことができないと思われるようになった。そこで私たちは車を捨てて、荷物の一部分だけを馬に持たせ、その馬にまたがって進んだ。

進むにつれ、道はますます狭くなってきた。断崖から谷間に落ちるのを免れるため、岩がまっすぐに切り立っている山



側のほうに寄り添って前進せざるを得なくなった。ところが、どうしても荷物が山腹の岩に当たり、危うく振り落とされそうになるのだった。

崖から墜落して下にある岩に当たって碎かれることを恐れ、馬上の荷物を切り離れたところ、それは崖から下に落ちてしまった。私たちは馬の背にまたがって前進した。特に狭いところに来ると、バランスを失って墜落してしまわないかと心配した。そうした時に、馬の手綱を引いて安全に危険区域を通過させてくれる何かがあるようだった。

いよいよ道が狭くなり、これ以上馬に乗って進むことが危険に思われたので、思い切って馬を返し、一列になり、徒歩で行くことに決め、各自前にいる人の足跡を踏んで進んだ。この時私たちは、片側の白い壁の上から何本もの綱がさがっているのに気がついた。私



たちはこれにつかまり、道から転び落ちないように、バランスを保ちながら進んでいった。私たちが前進すると、その綱も動いた。道がい

よいよ狭まってきたので、靴を脱いで歩いたほうが安全であることに気づいて、これを脱ぎ捨てて進んだ。後には靴下もないほうが安全に歩けると考えるようになり、これを脱ぎ捨て素足で前進した。

その時私たちは、不自由と困難とに慣れていない人々のことを思った。彼らは今、どこにいるのだろうか。彼らは、旅をしている一団のうちにはいなかった。道の様子が変わる度ごとに、ある者はあとに残され、前進を続けたのは艱難辛苦の経験をなめてきている者だけであった。いよいよ道が困難になればなるほど、彼らはますます勇気を奮い起こし、目的地に向かってまい進した。

道のところから転落する危険がいよいよ増してきた。私たちは白い壁のほうに寄り添って進んだが、十分な足場がないほどに道が狭まってしまった。体の重みが、ほとんどその綱によって支えられていたのであった。この時、「私たちは天の綱によって支えられている。私たちは天の綱によって支えられている」との叫びが聞こえた。狭き道を歩んでいるすべての者は、これと同様の叫びを発した。



下方の深い谷底では、人々が歓楽と酒宴にふけているようであった。彼らの騒ぎを耳にしたとき、私たちは戦慄を禁じ得なかった。私たちは種々

の下品で卑しい歌謡、汚れた冗談や神を汚してはばからない言葉などを耳にした。器楽の音、それに混じる高笑い、これらと交錯して怒りののしる声、もだえ苦しみ悲しみ泣く声を耳にした。そうしたことを耳にするにつけ、私たちはいっそう熱心にこの険しくて狭い道を前進するようになった。上から垂れ下がっている綱だけに頼って、ほとんど全身を支えて行かなければならない時がますます多くなってきた。ところでこの綱は、次第に太くなってゆくのであった。

この時私は、側面の美しい白い壁が血で染まっていることに気づいた。壁がこのように汚れているのを見て残念な気がしたが、すぐまたその壁が血で染まっているのが当然であると思うようになった。この道を通る者は、自分よりも先に行った者が、この同じ険しい道を前進したという事実を知り、先に行った者も耐え

ることができたのならば、自分たちにも不可能ではないと勇気を奮い起こすことができるからであった。また壁の血を見るとき、自分の痛む足から血が流れていても落胆せず、先の者も自分と同じ苦痛をしのんだ事実を知って励まされるのであった。



ついに私たちの道は、岩石の広い裂け目のところまでくると尽きてしまった。これ以上足場となるわずかな地もなくなった。全身の重みをその綱で支えるだけになってしまった。しかも、その綱は体の太さ位になっていた。ここまで来て、一時私たちはどうしたものかと当惑せざるを得なかった。私たちは恐る恐る、「この綱はいったい何に掛かっているのだろうか」と口にした。夫は私のすぐ前にいたが、額からは大粒の汗を流し、こめかみと血管は二倍の太さになって、口からは苦しそうなうめき声を発していた。わたしの顔からは汗がだらだら流れ、いままでに経験したことのない苦痛を感じた。前途のさらに恐るべき困難のことが、私たちには予期された。ここでくじけてしまうならば、せつ

かく今まで困難な道を耐え忍んできたことが徒労に帰してしまうのであった。



岩の裂け目の向かい側には、草が15センチばかり伸びている美しい野原があった。別に太陽は見えなかったが、輝かしい和やかな光が、あたかも野は金銀でもってできているかのように、これを一面に照らしていた。地上のどんな場所も、この時の野の美と栄光とは比べものにならなかった。それにしても私たちは、果たしてその場所までたどり着けるであろうかとの考えを起こさざるを得なかった。綱が切れたならば、もうそれまでであった。「この綱は何に掛かっているのだろうか」との、苦しげなあえぎ声が聞こえてきた。

一時私たちは容易に進むことができなかった。その時、「私たちの希望は、全くこの綱に頼るのみである。それはこれまでの困難な道のりにあって、私たちの頼みの綱となってきた。今になって、私たちを助けてくれないことはない」と叫んだ。それでもまだ不安を感じて躊躇していると、「綱をたらし、これを持つお方

は神である。恐れるには及ばない」との声が聞こえた。その時、私たちの後ろにいる者がこれを繰り返した。「ここまで安全に導いて下さったのは神であるから、今になって助けて下さらないことはない」と。

そこで私の夫は、その綱にぶら下がって身の毛もよだつその深淵を飛び越え、無事に向こうの野原に着いた。ためらわずに私も彼のあとに続いた。私たちはどれほど安堵し、神に対する感謝の念に満たされたことか。いっせいに神に対する賛美と勝利の声が上がるのを耳にした。私は、全く幸福であった。



私は目を覚ました。経験させられた困難な旅のため、全身の神経は震えていた。このうえ夢の説明までする必要はないと思う。その夢はわたしの心に非常な印象を与えた。それは今でもとうてい忘れることはできないもので、微細な点にわたっても、常に生き生きとした記憶を蘇らせるほどである。



狭き道の旅 -リバイバルシリーズ-

※頒布価格 100 円

発行 平成 24 年 1 月 16 日

著者 エレン・ホワイト

発行所 サンライズミニストリー

〒 905-0428

沖縄県国頭郡今帰仁村今泊 1471

電話 0980-56-2783

FAX 0980-56-2881

Email info@sunriseministry.com

www.sunriseministry.com

著者 E・G・ホワイトについて

もっと詳しく知りたい方のために...

The LIFE and LABORS OF ELLEN G. WHITE

“ ホワイト夫人略伝 ”



A5 版 141 頁 700 円

ホワイト夫人は70年以上の長期間にわたり、一貫して福音事業のために苦心した近代における唯一の信仰的存在である。彼女の若い頃の物語と、彼女が少女時代において早くも救霊のために力を尽くした経験については、本書中に彼女自身の飾らない文章で記述されているが、これは必ずや読者に深い興味を抱かせるであろう。

お問い合わせ、お申込みは下記の連絡先まで

サンライズ ミニストリー

〒905-0428 沖縄県国頭郡今帰仁村字今泊1471

TEL(0980)56-2783 FAX(0980)56-2881

info@sunriseministry.com

www.sunriseministry.com



リバイバル小冊子シリーズ

No.1 安息日問答

No.2 アピール

No.3 装身具について

No.4 狭き道の旅

No.5 リバイバルと改革

No.6 神の聖安息日の遵守

No.7 今

No.8 終末時代における霊の賜物

No.9 小さな光と大きな光

No.10 預言の霊に関する指導原理

No.11 サタンのわな

No.12 人類が直面している世界情勢

No.13 田舎の生活

No.14 十戒

No.15 主のぶどう園

No.16 背教のアルファ

No.17 終わりの時に備えよ

No.18 どのようにして安息日を守るのか

No.19 キリスト論

No.20 救いの確証

No.21 もうひとつの箱船

